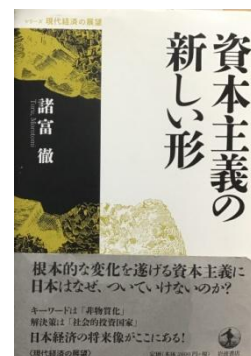


諸富徹『資本主義の新しい形』を読む

写真は岩波書店「シリーズ 現代経済の展望」の一冊として、2020年1月に刊行された諸富徹氏の近著である。表紙カバー裏から一資本主義が「非物質化」を急速に進めている。日本はなぜ、その変化についていけなくなったのか。そこにこそ経済停滞の真因が潜んでいるのではないか。現代の構造変化の核心である「資本主義の非物質主義的転回」を分析することを通じて、日本企業の産業競争力の低下、経済格差の拡大、温暖化対策の停滞などの課題を理論的かつ包括的に考察。資本主義を持続可能で公正なものにする「社会投資国家」の将来構想を打ち出す迫力の一冊。



本書が取り組むのは、次の三つの課題である。資本主義はどこへ向かうのか？ 「資本主義の新しい形」における市場と国家の関係は？ 日本企業、そして日本経済の将来像は？ こうした今日的で野心的な課題に迫るために、本書は次の5章から構成されている。第1章 変貌しつつある資本主義、第2章 資本主義の進化としての「非物質主義的転回」、第3章 製造業のサービス産業化と日本の将来、第4章 資本主義・不平等・経済成長、終章 社会的投資国家への転換をどのように進めるべきか

あとがきにも書かれているが、本書を貫く資本主義の「非物質主義的転回」についてふれておきたい。諸富氏の著書で「非物質主義的転回」を最初に目にしたのは、2003年刊行の『思考のフロンティア 環境』岩波書店（他2冊も同じ）である。

次いで2009年刊行『ヒューマニティーズ 経済学』で次のように述べている。経済学にとっては、筆者が「資本主義の非物質主義的転回」と呼ぶ、生産と消費の両局面にわたる大きな構造変化が今後、生産と消費にどのような影響を与え、産業構造をどのように変えることになるのか、それがどのような景気循環を生み出すのか、そして、それがどのような分配構造を作り出していくのかという点に、分析上の新しい課題を見出していく必要があると考える。さらにいえば、我々の経済システムが究極的に目指すべき「持続可能な発展」と、このような資本主義の非物質主義的転回がどのような関係を持つのかについても解明される必要があるだろう(141ページ)。

そして『岩波講座 現代』第3巻（諸富編）『資本主義経済システムの展望』第10章、2016年に寄稿した「資本主義経済の非物質主義的転回」が本書の原型となる論稿であり、ノートに記録したことを記憶している。「知識化」ではなく「非物質化」という言葉を用いるのは、知識を含めてより広範な資本主義の変化を捉えるため。「資本主義の非物質主義的転回」とは、生産と消費の両面で「物的なもの」から「非物的なもの」への重点移行が進行することを意味する。「社会的投資国家」の台頭が、「資本主義の非物質主義的転回」の一つの帰結である。

本書は資本主義の「非物質主義的転回」をキーワードに、資本主義の構造変化を分析する著者 10 数年にわたる研究の成果である。グローバル化かすすむ世界で「資本主義の新しい形」、「資本主義をいかに持続可能で公正なものにするか」に迫る力作といえよう。現代資本主義の市場と国家の関係を問うなかで、人的資本投資を重視する「社会投資国家」への転換を提唱する。資本主義の「非物質主義的転回」と国家について、社会投資国家という将来構想を提起し、さらに「脱炭素化」の意義や経済・企業戦略にも言及している。

本書では大胆に仮説を提起して、国内外の文献や資料から、それを実証している作業にも注目した。日本企業の国際競争力低下の原因は、進行しつつある資本主義の「非物質化」への不適合にあるという仮説をたて、「脱炭素化」への挑戦は、日本企業に新しい投資機会をもたらし、産業構造転換や高付加価値化にも寄与する戦略であると、問題を投げかける。

本書を読んで疑問に感じたことも指摘しておきたい。まずは、本書の「資本主義の非物質主義的転回」「資本主義の非物質化」というキーワードである。この言葉には当初から疑問というより、違和感を覚えてきた。筆者は生産・消費の両面の変化を総合的に捉えるには、「知識化」より「非物質化」という概念を手掛かりに分析するのが、より有効だとする。それを認めるとしても、もうすこし違った「言い回し」ができないのか。資本主義の構造変化を的確に表現するキーワードについて、著者に聞いてみたい。

日本企業の国際競争力低下について、アメリカなどと比較して「非物質化への不適合」に原因をもとめるが、不適合の原因について、企業戦略などからより突っ込んだ検討がほしい。日本企業のグローバル化への対応、バブル崩壊後の経済政策と企業行動、地域にねざす「ものづくり」の評価、「脱炭素化」と「非物質化」の関係など、さらに検討すべき課題は多いのではないだろうか。

資本主義の「非物質主義的転回」と社会投資国家への転換についても重要な論点だと考えるが、社会投資国家という国家のありようと地方自治体、とりわけ日本の現実との関わりなど、さらなる検討がもとめられる。

現代は国家のあり方自体が問われている。不平等や格差を縮小させながら経済をどう発展をさせるか、それに社会投資国家がどうかかわるのか。人的資本投資の中身、労働・社会政策を具体的に吟味していく必要がある。さらに、環境と経済を両立させるカギは「非物質化」というが、両者はそもそも両立できるものなのか。維持可能な社会、経済「成長」自体が問われているのではないだろうか。

本書を読んだ感想めいたこと、私なりの「注文」を書いたが、「資本主義の新しい形」にせまるスケールの大きな迫力の一冊であり、現代経済の展望に関心のある多くの人に読んでもらいたい。

(2020年6月17日)